

特118

37

新生の力

京都大谷礼本和印寺

臨時関東地方震災救済事務局

国立国会図書館



始





新
生
の
力



京大谷本願寺

臨時關東地方震災救援事務局

新 生 の 力

何といふ恐ろしいことであらう。半世紀にわたつて積みあげた國民努力の文化が、ひと揉みに崩されて仕舞ひました。あれほどの事が、この世にあり得やうとは、到底考へられぬほど悲惨なことであります。親は子に別れ、夫と妻とは境を異にし、幸に一命を拾はれた方でも、住むに家なく食ふに食なく、幾百萬の人達が路頭にまよはるゝ有様は、聞くさへ膚に粟を生ずるばかりで、何と御見舞申しあげてよいか、たゞ驚きと悲みに息もつまるほどであります。

大正 12. 11. 3
内 交



今さらくたくしい談義沙汰することは、却つて禮を失するかも知れませんが、御見舞にかへて一言申させてください。悲嘆と恐怖と、そして將來の問題について御胸もふさがり、そのうへ衣食住の不自由から御身體も綿のやうに疲れて、心しづかに讀んでいただく氣力も暇もございませぬでせうが、何卒私達に御見舞を申させてください。

二

人達はさまざまに申しませうが、釋迦世尊はこの世の相を示して、「人生は無常である、人生は苦である」と申されました。これだけ人間の方でござうすることも出来ない、嚴然たる事實であります。

そしてこの世が變りづめであること、従つて私達が始中終苦しまねばならぬこと、は、決して神や佛が罰を垂れたまふがためでもなく、また悪魔がたゝるのでもない、私達各自の思想と行爲とによつて造り出すのであると教へられました。や、詳しくいへば、私達は晝となく夜となく、始中終心に何事かを企て、身に何事かを行つてゐますが、これはたゞこの世に生れてから初めたのではなく、始めも知らぬ大昔から繰りかへしく致してゐるのであります。そして蠶が我から糸を吐いて繭をつくり、蛹となつて其中へとちこもり、更にまた我から形をかへて蛾となるやうに、私達は思想と行爲とによつて我から身體と境界とをつくり、更にまた我が思想と行爲とに

よつてその身體と境界とを絶えず變化する。かやうに我から變化しながら、而かもその變化によつて苦しまねばならぬ。變らねばならぬものを、變らしめないでおかうといふ迷心をもつて苦しまねばならぬ。何といふ痛ましいことであらう。而かもこの痛まじさに溺れねばならぬのが、私達迷へるもの、悲しさであります。

三

このたびの惨害、これは決して神や佛の下したものではありません、私達自らが生んだものであります。それは餘りに無情な云ひ方のやうであるが、然しこればかりは言葉を曲げることが出来ませぬ。科學者はこのたびの惨害も、單に物質の變化から起つたものであると解

釋しませう。それは一切を物質的に説明しやうとする科學そのものの性質からくる結果であるが、釋迦世尊はこれを自己の上に味ひ締められて、かゝる物質の變化もひとへに自己の思想と行爲とから起つたものであると申されます。病氣、大火、地震、洪水といった不幸も我から出たものであり、健康、平和、豊年といった幸福もまた自分から出たものである。従つて今後の幸福を得るもその起點は我にある、不幸を來たすもその根本は自分にあると覺悟せねばならぬ。これが宇宙に充つる嚴然たる因果の方則であると申されます。

四

それゆゑ、私達は今三つのことに目醒めねばなりません。

第一は、この人生における物質上の幸不幸の原因が神や佛にないのであるから、神や佛にいかほご願ひ求めても、それは何の甲斐もないと云ふことであります。今度の災害の最中、早く安全に免れさせていたゞきたいと、心底から神や佛に祈つた人は數百萬人もあつたであらうが、然しかやうに祈りつゝも、或は焼かれ、或は溺れて、悲惨な最後を遂げました。それは祈りが浅かつたからだと云ふ人もあらうが、あの場合誰がさやうな浅い薄つべらな祈りをしやうぞ。眞實に心ぞこから、力の限り祈つたに相違ない。而かもそうした人達までが、聞くも痛ましい惨死をとげました。元來人生における物質上の幸不幸は佛や神とは全く關係がないのである。従つていかに

熱烈に祈つたとて、何の功もあらはれぬのであります。

五

第二は人生の幸不幸の原因は全く自己にあるゆゑ、將來のことも全く自己がその責任を負はねばならぬと云ふことであります。此度の災害によつて、私達は幾十萬といふ親しい同胞達を失ひました。また物質的にも幾拾億圓といふ損害を招きました。これら失はれたる同胞達の靈をなくさめ、同時に莫大の損害をとりがへすには、一方ならぬ苦しみを重ねゝばならぬ。それは決して容易なことではないけれども、この苦しみは誰が負はねばならぬか。何時までも他國の同情にたよつてゐることはできない。私達國民の各自が粉骨碎身の

大覺悟をもたねばならぬ。誰か、してくれらうと考へてゐるならば、なほ、恐るべき結果を招かねばならぬ。この際私達は火のやうに強い國民的自覺を要します。苦しけれども奮ひ立ち、疲れながらも起きかへつて、將來の幸福を來らすべく努めねばならない。目下の生活に困りはて、ゐられる人達に對して、かやうなことを申しあげるは、餘りに冷酷に過ぎると考へる人もありませうが、然し許してください、是れはごうしても御互が覺悟せねばならぬことであります。悲しい涙を落しながらも其の悲しみのみに沈まず、苦しい身をあへぎながらも其の苦しみに敗けず、氣をとりなほし、勇者の姿をもつて、白骨と焦土の上に突つ立ちあがることが最も大切であります。

あります。

六

然しながら、なほ第三に進んで目醒めねばならぬ事があります。何といつても人生は無常であり、苦である。私達が迷つてゐる限りこれだけは免れることが出来ない。幸にこのたび命拾ひせられた方も、また大きな損害から免れた方も、更にまた全く災害を受けなかつた方も、いづれは必ず死の苦痛を受けねばならない。否、死のみでなく、この世にあつてか、或は死しての後にか、必ず死以上の苦杯を手にならねばならない。これは私達自分の罪によつて報はるゝところである。現に私達は一人のこらずとぼくと苦の谷を辿つてを

るが、何時いつこれ以上いじやうの、否いなこれに比くらべやうのない恐おそるべき苦毒くどくに沈しづまねばならぬか知しれない。嚴密げんみつにいへば、たゞ知しれないといふばかりでなく、必ずかならず沈しづまねばならぬに決きまつてをる。たゞ晚おそいか早はやいかの相違さういばかりである。こればかりは一人ひとりとして免まぬるゝことが出來ない。たとひ一時いちじは巨萬きまんとの富とみを積つんで花はなの都みやこに榮華えいげわのありだけを盡つくしても、一朝いちぢやうの地變ちへんによつてグワラツと壞こわされる。またたとひ一時いちじは鬼たをもひしくばかりの丈夫ぢやうぶな身體からだをもつて力自慢ちからじまんの拳こぶしをかためたものでも、一夕いつせきの天災てんさいによつて薄紙うすかみのやうに引ひきさかれる。私達わしたちはごうしても唯ただこの境界きやうがいにのみ落付おちついてはゐられない。變りづめの世よに變らぬ力を得え、壞れづめの世よに壞れぬ生命いのちをうけて、心こころを常住じやうぢやうの大地だいちに打ち

たてねばならない。私達わしたちの物質世界ぶつしつせかいは極めて不自由ふじゆうであつて、萬事ばんじ思おもふまゝにはならぬけれども、私達わしたちの心こころの世界せかいは極めて自由じゆうである。變る世よに變らぬ天地てんちを見出みいだすことは、たゞ心こころのみに許ゆるさるゝ權けん能のうである。こゝからこそ眞實しんじつ新生しんせいの力ちからが湧わき出でるのであります。

七

それは極めて六ヶ敷むつしいやうではあるが、また極めて易やすいことでもあります。自分の力ちからのみで成なしとげやうとすれば困難くわんなんであるけれども、御佛みほとけの御力みちからによれば易々やすやすたる事ことであります。この世よの親おやを信しんずる子供こどもすら、親おやに手てを引ひかるゝときは火ひの中なかへも飛とび込んだといふ事實じじつが、このたびの震災しんさい中に澤山たくさんありました。私達わしたちも心こころの御親みおやたる御佛みほとけ

の刀をいたゞくとき、ほんとうに腹底の力が出来るのである。「如來は一切のために慈父母となりたまふ。當に知るべし、もろくの衆生は皆これ如來の子なり。世尊の大慈悲、衆のために苦行を修めたまふこと、人の鬼魅につかれて狂亂して所爲多きが如し」とは『涅槃經』の御言であります。御佛は私達すべてのもの、心の御親である、この御親が私達の苦惱を見るに忍びず、必ず迷の海から救ひあげねばならぬと骨折りたまふことは、ちやうど狂人のやうであると云ふのであります。

私達はこのたびの災害中、猛火のなかより我子を救ひ出さんと奮然として火焰に飛び込んだ母性愛の尊さを、幾度も聞きました。そ

の何物にもひるまぬ勇氣と慈愛とには感泣するより外はないが、心の上の御親もまたこれに同じい。否これらの幾億倍の力と愛を以て、私達をこの恐るべき迷の世界より救ひ上げたまふのである。私達この御親の大慈悲にすぎるとき、たとひ身は人生苦惱の毒中に沈むとも、心は常に希望と勇氣に充たされて、ころんでも立ち上り、こけでも起き上る力を持つことが出来る。「たとひ大千世界に充ちみてる猛火のなかを過ぎても、御佛の御名を聞け」と、我が親鸞聖人が教へられたのは、是れがためであります。無残なる災害は幾萬といふ孤兒をつくりました。私達はその淋しい心を思ふとき涙なきを得ません。それと同時に、私達は心の御親から遠ざかつて、自ら精神上

の孤兒になつてはをらぬか。路頭に迷ふ兒を血眼になつて探す親があるやうに、心の御親を失うてゐる私達を、狂人になつて尋ねる御佛のましますことを忘れてはをらぬか。改めて考へなほしたい事があります。

八

今まで苦心して蓄へられた命より次の財産を失ひ、この世の寶といふべき親や子に別れられた方々の悲愁と落膽とは、いかほど御察ししても足らぬことであります。然しながら、何卒この苦い言葉をさげること許して下さい。得たものは必ず失はねばならず、會うたものはまた必ず別れねばならぬが人生である。世に百年の人な

く、千年の家はない。それゆゑ、永久に失はない寶を得、永久に別れない親子となるのが最大急務である。御親、それは永久に別れたまはぬ心の親である。御佛の御力、それは永久に失せぬ心の寶である。御佛は私達を探し、私達にその寶を恵まうとしてゐられます。私達は探されてゐる、待たれてゐる、恵まれてゐます。それは心の上の御親であるから、私達に物質を恵みたまふ親ではないが、私達の心に眞實新生の力を恵みまたまふ御親であります。

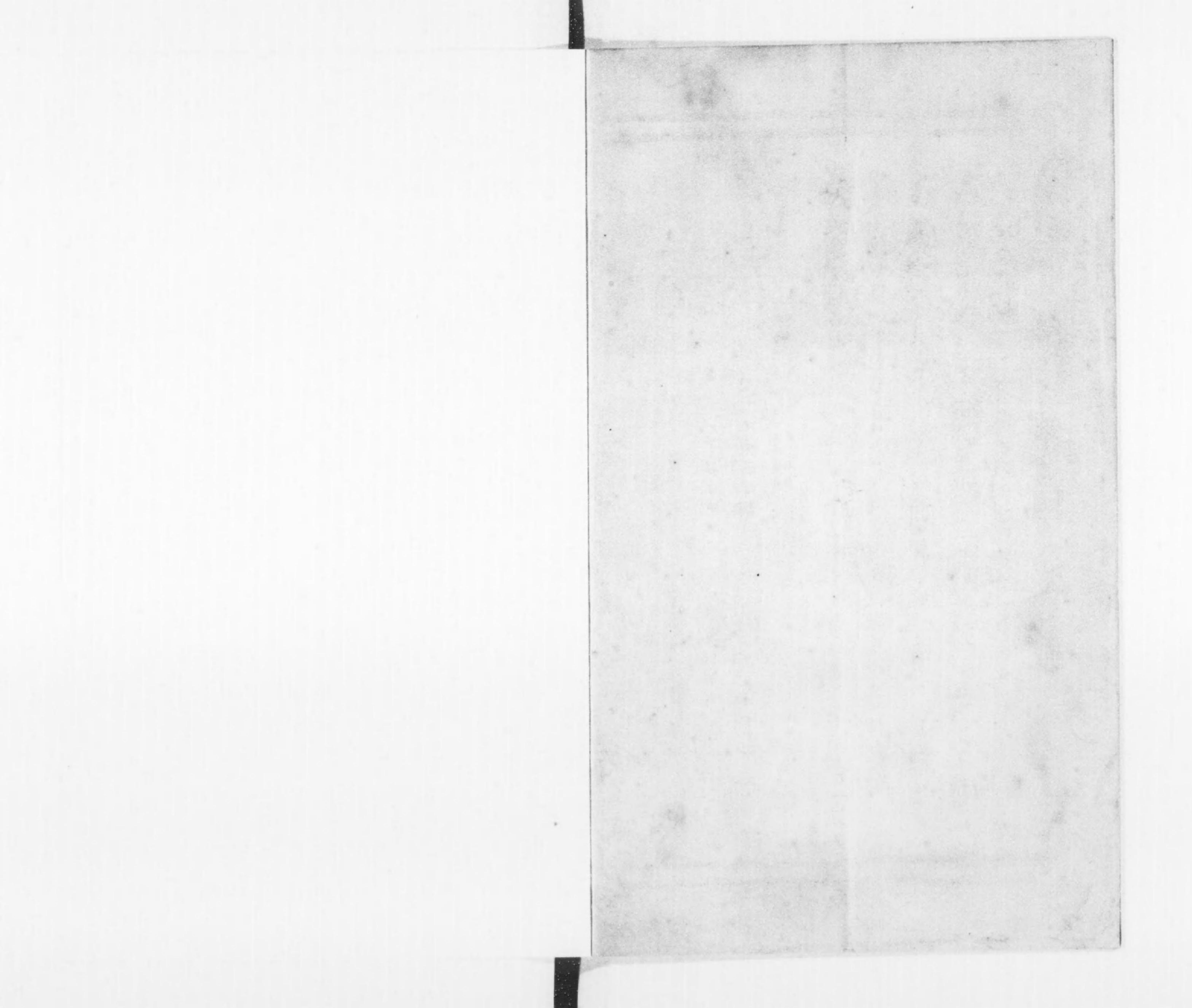
何卒この御力を力として、失はれたる幾十億の損害をとりかへし、死したる幾十萬の靈を弔いたいことであります。涙を拂うて下さい。荒れすさぶ冬の次には、必ず花さく春が参ります。それと同じ

やうに、災をかへて幸とするは私達の大きな責任であります。昔は「うき事のなほこの上に積もれかし、限なき身のためさん」と歌うた偉人がありました。礦石を赤熱の溶礦爐にいれて加工すれば、輝かしい黄金がとれます。熱火の溶礦爐に溶かされた私達の心を、このまゝ、抛げやつてはならない。御佛の力に起きあがつて精神界の眞實の黄金を得る作業に、直に着手しやうではありませんか。

大正十二年十月十日印刷
大正十二年十月十一日發行

【品 賣 非】

編輯者 京都府七條區九谷渡本願寺内 春日園 城
 發行者 京都府馬場通二條下ル 京都日出新聞社
 印刷所 京都府七條區九谷渡本願寺内 東地方震災救済事務局
 發行所 京都府七條區九谷渡本願寺内 東地方震災救済事務局



終